

アラビア語勉強会第一回レポート

セム祖語の音韻論

kwoj

2021年8月1日

(2021年8月15日最終更新)

要旨

※本稿ではじめて言語学にふれる方に配慮し、あらゆる術語について一から解説を与えなかったが、途中で諦めた。音声学の用語はわからなかったら各自調べて（もしくはわたしにきいて）ください。音声学については国立国語研究所の[この動画](#)を観るといいよ。

この世には祖先の共有を仮定すれば現在の類似性をよりうまく説明できる言語変種たちが存在しており、この言語変種たちのおのの共通祖先を歴史言語学のことで**祖語**と呼ぶ。祖語は子孫などの情報をもとに言語変化の一般法則を利用して推定することができ、これを**再構**（＝**再建**）と呼ぶ。アラビア語はセム諸語に属し、したがってセム祖語の子孫であるから、アラビア語単語の語源を調べる上でセム祖語にかんする知識は必須となる。今回わたしは、再構されたセム祖語の音韻論について、アラビア語・ヘブライ語への発展を挙例して簡素な解説を加える。

そもそも音韻論とはなにか

人類の使う自然言語（＝人間言語）には発話言語と手話言語がある。ここではわたしの見識不足により、発話言語の音韻論についてのみ述べる。ただしこれは、手話言語の音韻論とかなりの部分で重なりがある。

自然言語は、意味を持つ最小単位が一つ以上集まって単語をつくり、一つ以上の単語^[1]が**文**を作る。ここでいう、意味を持つ最小単位を**形態素**と呼ぶ。たとえば、(1)に示したアイヌ語の文は *ku*＝「一人称単数自動詞」、*jaj*＝「再帰」、*raj*＝「死ぬ」、*-ke*＝「他動詞」という四つの形態素からなる一つの語によって成り立っていると考えられる。

- (1) *ku=jaj-raj-ke* 「わたしは自殺する（直訳：わたしは自分を死なせる）」

ここに説明した形態素を支配する文法を研究する言語学の分野を形態論と呼び、文を支

^[1] 単語とはなにか、形態素とはなにか、というような定義は、厳密にしようとするとなりに難しいし、わたしとしても説明しきれぬか自信がないので論じない。

配する文法を研究する分野を統語論と呼ぶ。形態素はさらに音声へと分解することができる。音声は [] によって囲って示す。この、言語のなかで最も小さな単位を支配する文法 (= 音韻) を扱うのが音韻論である。

音韻にたいするアプローチは、生成音韻論、最適性理論、進化音韻論などとさまざまなものがあり、人類の言語能力の完全な理解を目指して現在も盛んに研究されている。しかし、たんに言語の記載（言語学の言葉では「記述」と呼ぶ）を目的とするときは、人間の言語能力や言語という系の奥深くまで入り込もうとする現代音韻論の枠組みは、アメリカ構造主義言語学が生み出した**古典音韻論**と比すればあまり実用的ではない。少なくともいまのところ、祖語の音韻もふつうは古典音韻論によって記述されており、セム祖語も例外ではない。

古典音韻論では、形態素の弁別を担うことができる最小単位を指摘し、これを**音素**と呼ぶ。音素は // によって囲って示す。(1) の例では、「死ぬ」を意味する *raj* という音声は *r, a, j* という三箇所の音声に分解できるが、それらひとつひとつが音素である。同様に、「一人称単数自動詞」を意味する *ku=* も *k, u* という二箇所の音声に分解でき、それらひとつひとつが音素に属する。たとえば *raj* 「死ぬ」の /a/ の箇所が [a] (非円唇後舌広母音) として実現している、*jaj* 「再帰」の /a/ の箇所が [a] (非円唇前舌広母音) として実現している、それらはすべて /a/ というひとつの音素だと考えられる——アイヌ語には [a] であるか [a] であるかによって意味が変わる例がないからである。反対に、アイヌ語の /r/ と /j/ が別の音素であるとする根拠は、*raj* 「死ぬ」と *jaj* 「再帰」のような意味の違いを表現できるからである。

母音

セム祖語の母音音素は、*a = 低中舌母音、*i = 高前舌母音、*u = 円唇高後舌母音の三つで、それぞれ長母音と短母音が存在する (Huenergard 2008: 231)。

古典アラビア語の母音体系は極めて保守的であり、ほとんどの環境でセム祖語の母音と同一の音素が観察される (Huenergard 2019: 52)。セム祖語の短母音は聖書ヘブライ語で多彩な反射形 (※英 reflex. ある祖語の単語の子孫の単語をこう呼ぶ) を示し、**ある環境では保存されるが、ある環境では弱化したり、低舌化したり、後舌化したりする (enwp)**。一方で長母音の反射形は、**カナシ推移** (セム祖語 *a: > カナシ諸語 *o:) によるもののほかはとくに変化がない (Steinberg 2010)。

- *k'arn- 「角」 > 古典アラビア語 k'arn- :: 聖書ヘブライ語 kārān (Millitaev & Kogan 2000: 151)
- *d̥zibl- 「牛馬糞」 > 古典アラビア語 zibl-/zabīl- :: 聖書ヘブライ語 zābāl 「堆肥を作るために積み上げた葉」 (Millitaev & Kogan 2000: 265 を修正)
- *xuld- 「もぐら」 > 古典アラビア語 xuld-/xald- 「モグラ色 (taupe)」 :: 聖書ヘブライ

イ語 ḥōlād「もぐら」, ḥuldā「もぐら；いたち」(Millitaev & Kogan 2005: 147)

- *la:「標準否定辞」(Huehnergard 2019: 68) > 古典アラビア語 la: :: 聖書ヘブライ語 lo: (著者)

※セム祖語には指令の様相性とともにつかう特殊な否定辞 *ʔal も存在した。

母音の対応は **enwp** にまともまっているようであるが、正確さは判断しきれない。

子音

セム祖語には伝統的に 29 個の子音が再構されているが、その音価についてはさまざまな議論がある。つぎにアステリスクとともに示したのは本レポートが用いた IPA に近い表記のほうで、書記素 () のなかにあるものが伝統的なものである。

	両唇	歯間	歯歯茎	硬口蓋	軟口蓋/ 口蓋垂	咽頭	声門
破裂音	*p ⟨p⟩ *b ⟨b⟩		*d ⟨d⟩ *t' ⟨t'⟩		*k ⟨k⟩ *g ⟨g⟩ *k' ⟨k'/q⟩		*ʔ ⟨ʔ/?⟩
鼻音	*m ⟨m⟩		*n ⟨n⟩				
顫動音			*r ⟨r⟩				
摩擦音		*θ ⟨t⟩ *ð ⟨d⟩ *θ' ⟨θ/z⟩	*s ⟨š⟩		*x/χ ⟨h⟩ *ɣ/ʁ ⟨ġ/g⟩ (*x'/χ' ⟨x'⟩)	*h ⟨h⟩ *ħ ⟨ħ/ʕ⟩	*h
破擦音			*ts ⟨s⟩ *dʒ ⟨z⟩ *ts' ⟨s'⟩				
側面音			*l ⟨ś⟩ *l ⟨l⟩~⟨t⟩ *l' ⟨ś/ð⟩				
接近音	*w ⟨w⟩			*j ⟨y⟩			

セム祖語の阻害音 (= 破裂音 ∪ 摩擦音) には有声音・無声音・**強勢音**の三組が再構される。強勢音はアラビア語で咽頭化音もしくは軟口蓋化音として実現するあの子音のことである。近年では、強勢音の祖語の音価は**放出音**であったとする仮説が有力なようである。これは、放出音が子孫言語の大勢を占める音価であり (エチオピア・セム祖語、現代南アラビア諸語)、聖書ヘブライ語とアッカド語のような古代言語においても放出音として実現した蓋然性が大きいことによる (Huehnergard 2019: 51)。強勢音の音価について論ずるときに出てくる音声変化という仮説は、過去予測をおこなう歴史仮説のひとつである。たとえば**インテリジェント・デザイン**が非科学であるのと同様に、歴史仮説では、想定しなくてはならない仮説の数をできるだけ少なくした仮説が尤もらしいとみなされ、ひろく支持をあつめることになる。

セム祖語の歯擦音の音価はいろいろな議論があり、**enwp** によくまともまっているっぽいので読むとよさそうである (「っぽい」というのは専門ではないため)。要約すると、① *⟨ś⟩

が側面音だったのは子孫群からみても借用語からみても文献学的にみてもまず間違いない。② ***ʕ** も子孫群からみて歯間音でまず間違いない。③ (1) ヘブライ語の読音の伝統 (←二千年も残ってるのすごい) で ***ʕ** が破擦音になる；(2) ゲエズ語 ***ʕ** をギリシア語話者が音写すると破擦音になる；(3) フェニキア語・ヘブライ語 ***ʕ** をラテン語・ギリシア語・エジプト語話者が音写すると破擦音になる……みたいにかくさん転写上の証拠があるので、セム諸語の大半では [s] だけど、たぶんセム祖語 ***ʕ** は破擦音であろう。④ すると ***ʕ** は通言語的に [s] になるほうが尤度がたかい。というような議論がされており、③ を敷衍して歯間音と側面音が全部破擦音なんじゃないかと言っているひともいる、という感じがしい。どの仮説がどのくらい信用できるものなのかがよくわからないのでそのうちちゃんとしらべてレポートにしたい。ただ、私見をのべれば、***ʕ** の音価を通言語的な自然さだけで決めるのはどうかとおもう (日琉祖語の *s ってたぶん [ɕ] だし)。

子音の対応も **enwp** によくまとまっているようであるが、正確さは判断しきれない。

ほかの子音

Huehnergard は 30 番目の子音 ***x** の再構を提案しているが、ひろく受け入れるには至っていない (Rubin 2017: 860)。また、Millitarev は 2005 年の時点でエチオピア・セム諸語から円唇軟口蓋系列の存在を主張しているが、共著者の Kogan によると対応は既存のセム祖語体系からほとんど予測可能であり、受け入れがたい (Millitarev & Kogan 2005: LXI)。Millitarev は両唇破裂音にも強勢音が再構できると主張しているが、Kogan によればこれも十分な信頼性があるわけではない (Millitarev & Kogan 2005: LX)。ただし、**enwp** によれば、Woodard は子孫群に強勢両唇破裂音が存在することは祖語が強勢両唇破裂音を許す体系を有したことを示唆すると書いているというので、要検証。ただ私見をのべれば、強勢両唇破裂音が見られるのは Millitarev & Kogan によればギリシア語などからの借用語においてであるから、通言語的には、借用語のために本来存在しなかった領域まである素性の出現が拡大することは十分に受け入れられる (たとえば共通モンゴル語の ***ʃ** は中国語からの借用語のために ***ʃ̣**, ***ʃ̤** の素性 [+palatal] をつかって新しく生まれた音素であると考えられる) ので、音素目録にまで記載する **enwp** の姿勢はおかしいのではないと思われる。

音素配列論

音素をどのように配列できるかを記述する音韻論の分野が、**音素配列論**である。韻律を記述するために、音節核とその周辺の分節音をひとまとまりにして**音節**と名付ける。母音 = V、長母音 = V: と子音 = C を用いてセム祖語に可能な音節をしめすと、CV, CVC, CV: の三種類だけである。したがって、セム祖語には二重子音・三重子音や、母音のみだったり、母音で始まったりする音節は存在しない。

セム祖語の母音は、*aw, *aj のように直後にわたり音 *w, *j を伴うものがあり、これが「二重母音」と呼ばれることがある。

- *ʕajn-「目」> 古典アラビア語 ʕajn :: 聖書ヘブライ語 ʕajn (Millitaev & Kogan 2000: 28)
- *mawt-「死」(Millitaev & Kogan 2000: 304) > 古典アラビア語 mawt :: 聖書ヘブライ語 mávet (著者)

また、*VjV, *VwV のような連続が「三重母音」と呼ばれることがある。「三重母音」は不安定で母音を減らす方向に変化してゆく傾向がある (Huehnergard 2008: 232)。セム祖語の「二重母音」*ij, *uw と長母音 *i:, *u: との区別はうしなわれており、また、**範列**による類推が発生していないかぎり、*iw > *i:, *uj > *u: の統合も祖語のじてんで発生している (Huehnergard 2019: 52)。*aw, *aj は融合して [o:], [e:] のように変化する子孫言語も多い (Huehnergard 2008: 231)。

子孫群の対応を説明するために、セム祖語の *l, *m, *n は成節子音の異音を有したとする説が提案されている (Huehnergard 2005: 230) らしいが、未見。そのうちちゃんと調べる。

強勢

セム祖語には強勢が存在したが、ヘブライ語のそのように意味の対立を担うものではなかった。強勢は古典アラビア語・アッカド語と同じく、最も語末に近いが最終音節ではない重音節 (≡CVC, CV:) に置かれる。ただし、重音節を有さないときは第一音節に強勢が置かれる。

参考文献

- Huehnergard, John 2008 Appendix 1. Afro-Asiatic, *The Ancient Languages of Syria-Palestine and Arabia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huehnergard, John 2019 **Proto-Semitic**, *The Semitic Languages, second edition*. Oxford: Routledge.
- Rubin, Aaron 2017 **The Semitic Language Family**, *The Cambridge Handbook of Linguistic Typology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Millitarev, Alexander and Kogan, Leonid 2000 *Semitic Etymological Dictionary, Vol. I Anatomy of Man and Animals*. Münster: Ugarit-Verlag.
- Millitarev, Alexander and Kogan, Leonid 2005 *Semitic Etymological Dictionary, Vol. II Animal*

Names. Münster: Ugarit-Verlag.

Steinberg, David 2010 **History of the Ancient and Modern Hebrew Language**, html. URL:
https://www.adath-shalom.ca/history_of_hebrew2a.htm. (2021 年 7 月 31 日)